

地味な巫女の私がS級冒険者に貫かれ、
クリトリスを剥きだして磨き上げられて。

連続絶頂放尿と、皇帝への机の下秘密の奉仕

第一章 聖女の影で床を磨く

第二章 掃除中の秘め事

第三章 夜の礼拝堂で暴かれる核

第四章 聖女ではなく、私を

第五章 邸宅の正体は宮殿

第六章 皇后の座と全穴調教

第七章 溺愛される一生

第一章 聖女の影で床を磨く

神聖な静寂が支配する、ベルシュテン神殿の回廊。私は、冷たい石床に膝をついて、使い古された雑巾でひたすら床を磨いていた。

巫女ではあるけれど、神殿の掃除係。それが、二十二歳の私の肩書き。

この神殿には、触れるだけで傷を癒やすという、伝説の聖女であるスフィア様がいる。彼女が歩く道は、常に薔薇の花が舞い、信者たちの歓喜の歌に満ちあふれたものだった。

それ対し私は、彼女が歩いた後に残るわずかな土汚れを消すための名もなき掃除係。分厚い眼鏡をかけ、地味な巫女服に身を包んだ、誰の目にも留まらない風景の一部。

こうして、床の汚れを落とす仕事があるだけでもありがたい……。そう思っていた。

その日の午後。神殿の門が激しく開き、血の匂いとともに彼らが、なだれ込んでくる。

「聖女様！ Sランク冒険者の、ディグルス様が深手を負われました！」

神殿中が騒然となる。運ばれてきたのは、黒い鎧を真っ赤に染めた大柄な男だった。

ディグルス・ルーマース。

この大陸で知らない者はいない、最強の冒険者パーティーのリーダーだ。

美しいスフィア様がすぐさま駆け寄り、白く細い手を彼にかざす。

「……慈愛の光よ、この者の傷を癒やしたまえ」

神々しい光が溢れ、男の傷口が塞がっていき、周囲からはため息と称賛が漏れる。聖女様の奇跡の力は、この国の宝とされていた。私は、人だからから離れた柱の影で、それを見つめつつ、彼が流した血の跡を掃除するためにバケツを持って控えていた。

……なんと神々しい……。

治療が終わり、ディグルスがゆっくりと上体を起こす。野性味あふれる端正な顔立ち。鋭い眼光は、死線を潜り抜けてきた男特有の、抗いがたい覇気に満ちていた。

スフィア様が、慈愛に満ちた微笑みを向ける。

「ディグルス様、もう大丈夫ですよ。お命はとりとめました」

誰もが、彼は聖女の手にキスをして感謝を捧げるのだと思った。けれどデイグルスは、聖女を一瞥もしない。彼は、人だかりを通り越し、柱の影で雑巾を握りしめる私の瞳を、真っ向から射抜いた。

「……………え？」

バケツの水が、波紋を立てて揺れる。私の心臓が、耳元でうるさいほどに鳴り始めた。分厚い眼鏡の奥の、冴えない私の瞳。ただの風景の誰にも見向きされなかった掃除係を、彼は獣が獲物を見つけたような、昏い情熱を孕んだ目で見つめている。

い、いや……気のせいだ。

そう思って、私は後ろを振り返ってみるが、こんな暗い場所には私しかいなかった。

そこに、聖女様の声。

「ディグルス様！ まだ！」

ディグルスは、他に目もくれずに聖女の介添えを振り払い、ふらりと立ち上がった。そして、私の目の前までくると、血に汚れた大きな手で、私の頬を包み込もうとした。

「……いたぞ。ようやく、見つけた」

低く、重厚な声。神殿の誰よりも気高く、そして傲慢なその響きに、私のなにかが、今まで感じたことのない妙な疼きをみせる。

「あ……、あの……」

私が困惑して震えていると、彼は不敵に唇を歪めて笑った。

「……お前、いい匂いがするな。床を磨く油の匂いじゃない……いい、女の匂いだ」

意味が分からなかった……。

突然、聖女の目前で放たれた、あまりにも野卑な言葉。私は顔から火が出そうになる。だがそこで、ディグルスがふらついて剣をついた。そこですぐに、聖女スフィアが叫ぶ。

「ディグルス様！ 全ての傷は塞がりましたが、血が足りていないのですよ。こちらで、しばらく療養していただきます。傷が完全に言えるまでは、ご滞在ください」
「そうか……わかった」

ディグルスは私から目を離し、神官に連れられて歩いて行くのだった。

第二章 掃除中の秘め事

あの日以来、ディグルス様は何かと理由をつけて私を呼び出した。傷の癒えを待つ間、神殿の客間に滞在している彼は、他の巫女たちが差し出す豪華な食事には目もくれず、決まって掃除係の私を指名する。

「おい、掃除係。この部屋の隅にまだ埃が溜まっているぞ。……入れ」

神殿の誰もが、彼は潔癖なのだと噂した。けれど、部屋に入り重い扉が閉まった瞬間、そこには冒険者の仮面を脱ぎ捨てた、一人の男が待ち構えていた。

「またそんな格好をして。お前は自分の価値に無頓着すぎるな」

だが、これが私の正装である。

「恐れ入りますが、私は一番下の巫女。掃除係にございます」

ディグルス様は、長い足を組んでソファアーに座り、じつと見つめる。私は震える手で、神殿の食堂から預かってきた籠をテーブルに置いた。

「あの……。今日は、クリーム鳥のパイが焼けたので……」

「ほう……。お前が持ってきたのか？」

彼はパイを一瞥し、不敵に笑うと、私の手首を掴んで強引に隣へ座らせた。

「あっ！」

大きな手の熱が、灰色の修道服越しに伝わってくる。

「……食べてみる。お前の口が、どうやってこれを汚すのか見せてくれ」

「そ、そんな……。これは高級なのです！ デイグルス様のために……」

「いいから、食べ」

逆らえない覇気に押され、私はパイを小さく一口齧った。サクリとした生地の中から、濃厚で熱いホワイトクリームが溢れ出す。

「あ……」

とろりと溢れたクリームが、私の指先に零れ落ちた。慌てて拭こうとしたその瞬間、デイグルス様の手が私の指を捉えた。

「汚したな。……俺が綺麗にしてやる」

「え……っ、あ……っ」

彼が私の人差し指を、まるごと口に含んだ。ぬるりとした舌の感触と、口腔の熱さ。指に吸い付くような強い圧。二十二年間、一度も男の人に触れられたことのない指先が、まるで弄られているような錯覚に陥る。

「じゆる……じゅぶ、じゆるうう……」

「ひあっ……！　で、デイグルス様……っ、ダメ、ですっ……！」

「何がダメなんだ？　クリームが零れたから、舐めとっているだけだろう？」

彼は指を解放すると、銀の糸を引く私の指先を愛おしそうに見つめた。掃除で荒れた、決して綺麗とは言えない私の指。けれど彼は、この世で一番の美味であるかのように、うっとり凝視している。

「聖女は清潔すぎて退屈だ。……だが、お前のこの指は、床を磨き、油に汚れ、そして……俺を芯から熱くさせる蜜を孕んでいる」

ディグルス様の手が、私の太ももに、ゆつくりと、けれど確実に這い上がってきた。

「お前、さっきからここが、パイのクリームみたいにとろとろ溶けている匂いがするぞ」

「ひゃ、あ……っ、あっ……♡」

修道服の布越しに、私の股間の中心を、指の腹でぐりつと押された。ただそれだけで、頭は真っ白になり、膝ががくんと震えた。

「あ……、あ……っ」

「もっと鳴け。……お前のその、誰にも見せない淫らな顔。全部俺に見せろ」

耳元で囁かれる傲慢な声。自分がただの掃除係であることを忘れ、彼の強引な指先に、屈服し始めていた。だがそこで、ようやく自制心が立ち上がる。

「おやめください！」

「ん？」

私が叫んだ拍子に、一瞬手の力が抜けた。私は、部屋から飛びだした。

第三章 夜の礼拝堂で暴かれる核

深夜の神殿は、静寂という名の膜に覆われていた。

私は月明かりが差し込む礼拝堂で、祭壇前の床を磨いていた。昼間のディグルス様の熱い指の感触が、まだ指先に痺れとして残っていて、仕事に身が入らない。

「……こんな夜更けまで、精が出るな。掃除係」

背後から響いたその声に、私は肩を跳ねさせた。振り返ると、そこには冒険者の軽装を纏ったディグルス様が、柱にもたれかかって私を凝視していた。

「デイ、デイグルス様……。こんな夜更けに……。おやすみしないでいいのですか？」

「ああ、聖女のおかげで傷は塞がった。だが……。ここが、疼いて眠れないんだ」

彼は自分の股間を指し示し、一歩、また一歩と近づいてくる。

に、逃げなくては……。

逃げようとしたわたしの腰を、大きな手ががしりと掴んだ。

「ひゃ、あつ……。！」

「……。なあ。お前の蜜壺を、見せてくれよ。一瞬でいいから」

耳元で囁かれた言葉に、私は自分の耳を疑った。最強のSランク冒険者。帝国の英雄。そんな御方が、地味な掃除係の私に、そんな……。

「な、何を……っ。見せるものじゃ、ないですっ……!!」

「あ……。だめ、そっか」

彼は、意外にもあつさりと引き下がった。けれど、その瞳は獣のように光っている。

「酔ってます、か……?」

「ああ。お前の、その地味な服の下がどうなってるのか、想像しすぎてエロくなってる」

……なんて、恥ずかしいことを。

けれど、その言葉を聞いた瞬間に、私の中がじゅくつと疼いた。この気高き英雄が、私の、誰にも見せたことのない裸を見たいと、本能のままに言っている。

「別にいいだろう? それとも、俺の命に背くのか?」

まるで、王族のような言い方だった。だけど、私の身分では逆らう事は出来ない。

「な、なにもしない……ですか？」

気づけば、自分からそんなことを訊いていた。ディグルス様の顔が、男の顔に変わる。

「……なんもしない。ただ、見せろ。お前がどんな顔で、そこを晒すのか知りたいんだ」

抗えない支配的な覇気と色気に、私の理性は音を立てて崩れ去った。私は震える手で、スカートの裾をゆつくりと、脚の付け根までたくし上げた。

「……座れ。そこへ」

命じられるまま、私は礼拝堂の冷たい祭壇の縁に腰を下ろした。ディグルス様は私の目の前の床に膝をつく、大きな手で私の両膝を掴み、ぐいっと左右に押し広げた。

「ひあぁっ……!!」

「色気のない下着だな。……地味な掃除係は、こんなのを履いてるのか」

「あ、あ……ありがとうございます……っ」

辱められているのに、お礼を言ってしまう。デイグルス様はわたしの目を見つめて、スツと股間に手を伸ばした。下着の付け根を掴み、スツ!と布をめくる。外の空気におまんこが触れてひやりとする。

「は、恥ずかしい、です……」

「なかも……綺麗だ。……だが、よく見えない」

生まれて二十二年、一度も誰の視線にも晒されなかった場所……。彼は慈しむように、けれど加虐的な指使いで、そこを開いた。

「あ、あああん♡♡」

「綺麗な桃色をしているな」

「は、恥ずかしいです」

「そして、お前の蕾も、もっとみせてみろ」

「や、やめ」

ぺろりと、クリトリスの皮をめくられる。

「見えた。……おい、おつきくなつて、ピクピク動いてるぞ」

「そ、そんなところ、見てはいけません」

顔から火が出るほど恥ずかしいのに、剥き出しにされた場所は、彼の熱い視線を浴び、ズキズキと脈打っている。

「……濡れてきたな。ほら、とろつとろの蜜が出てきた。……一回だけ、舐めていいか？
本当に一回だけだ」

私はもう、彼を拒むことができなかった。震えながらも、彼に告げる。

「……いつ、かい、だけ……なら……っ」

その瞬間、急に彼の瞳に狂おしい欲望が宿った。彼はわたしの両腿を力強く押し開き、剥き出しのそこに熱い顔を埋めた。

「じゅるりッ……!!」

「ひっ!!」

ディグルス様の熱い舌が、剥き出しのクリトリスを丸ごと吸い込み、掻き回し始める。

「や……やめ……」

「……やめるわけないだろう。こんなに蜜を出して、俺を誘っているのはお前だぞ」

ち、違う……言ったのはディグルス様……。

痺れる。ビンビンとした刺激が、股間から全身に広がっていく。床を磨いていた指が、スカートをこれでもかと握りしめる。

くりゅくりゅ。じゅるる。

「う、うあ！ 変になります！」

「いいんだ。それで……」

彼は顔を上げると、銀の糸を引くそこを凝視し、二本の指でふっくりと腫れ上がった、蕾の皮を左右から押し上げた。

くりゆくりゆ
♡

盛り上がった私の蕾をほじくるようにして、舌を尖らせてくりゆくりゆ弾いて来る。それが一定にくり返されているうちに、不思議な快感の圧が中から起き上がって来た。

「あ！ だめです！ デイグルス様！ なんか！ だめ！」

「見てみる。掃除係。お前のここは、受け入れるためこんなに熟れて、口を開けている」
「やあ」

れりゆれりゆれりゆれりゆ
♡

「う、うあ！ 変になります！ 頭が、とけちゃううう！！」

くりゆくりゆくりゆくりゆ
♡